

高畑誠一の出身地・愛媛県内子町にて、特別企画展記念シンポジウム「高畑誠一の軌跡を辿る～カイザーと呼ばれた男～」が開催されました。

高畑誠一の出身地である愛媛県内子町では、令和元年11月1日～12月8日にかけて内子自治センター開館15周年記念特別企画展「高畑誠一の軌跡を辿る～カイザーと呼ばれた男～」が開催されました。最終日となる12月8日、企画展の総括として、シンポジウムが開催されましたのでご報告します。



会場となった内子座（大正5年創建、重要文化財）



木蠟で栄えた当時の面影を残す八日市・護国の町並み

【シンポジウム概要】

■日時：令和元年12月8日（日）13：00～16：00

■場所：内子座

■主催：内子自治センター

■目的：四国の山間部のまち・内子から世界を見据え、日本貿易の先覚者となった高畑誠一。その功績は総合商社・鈴木商店の発展、日商株式会社の創立、松方コレクションへの協力、日本ゴルフ界の草分けとしての活躍など多岐にわたる。また、内子町においては、奨学金の創設や学校への支援などを通し、教育の向上に多大な貢献をされた。

その偉業を称え、生涯を広く紹介するとともに、当時の内子を振り返り、郷土を見つめ直す機会とする。

■プログラム：

- ・作家・玉岡かおる氏による基調講演
- ・愛媛県立内子高等学校2年生による総合的な学習の時間
「高畑誠一の研究」班研究成果発表
- ・パネルディスカッション
コーディネーター 小林正幸氏（双日株式会社）
パネリスト 玉岡かおる氏（作家）
野邑理栄子氏（神戸大学大学文書史料室室長補佐）
宮瀬弘吉氏（内子町立内子小学校校長）

【基調講演】

玉岡かおる氏「国家を相手に商った男―鈴木商店最前線・高畑誠一の欧州時代―」

○講師プロフィール



兵庫県生まれ。1987年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』で神戸文学賞を受賞し、作家デビュー。2009年、巨大商社・鈴木商店の女主人・鈴木よねの生涯を描いた『お家さん』で織田作之助賞受賞。主な著書に『蒼のなかに』『天涯の船』『花になるらん』など。

玉岡氏のご講演は高畑が入社した鈴木商店という会社についてのお話から始まりました。神戸の小さな砂糖問屋からはじまった店が、いかにして売り上げ日本一の商社にまで成長したかを神戸という港町の成り立ち、「お家さん」鈴木よねの存在と大番頭であった金子直吉の活躍から紐解きました。

また、高畑がロンドン支店長として第一次世界大戦下の欧州で多くの注文を得ることができたのは、約束を守る、日本人の堅実な商売ぶりが信用を得ていたからだとして、当時高畑が「皇帝（カイザー）を商人にしたような男」を評されたのは、欧州の人々が優れた、礼節のある人物として「皇帝」という表現を使った一面もあるのではないかと解説。

最後に、鈴木商店破綻ののち高畑が新たな会社・日商をつくったことは、鈴木商店の興した産業を育て、ひいては日本という国を成長させることにもつながったこと、高畑をはじめとする明治期の日本人には、この個の利益を越えた「国のために」という矜持があったことに言及。内子町の子供たちには、高畑を輩出したまちとしてこの矜持や夢を引き継いでいってほしいと結びました。

【高校生による研究成果発表】

基調講演後、休憩を挟んで愛媛県立内子高等学校2年生による研究成果発表を行いました。

今回の企画展開催にあたっては、愛媛県立内子高等学校の協力を得ており、総合的な学習の時間のテーマの一つとして「高畑誠一」が設定され、2年生13名が地元関係者への聞き取り調査を行いました。この発表は調査にあたった高校生を代表して2名が「知られざる高畑誠一の素顔」と題して成果を報告したものです。



発表では高畑の知られざる一面として、律儀で謙虚な人物であったことを紹介。そのコミュニケーション能力の神髄は「誠実さ」とであると分析し、周りへの感謝を忘れることなく高校生活を送りたい、自分の長所を生かして社会に貢献したいと結びました。

【パネルディスカッション】

成果発表に引き続き、高畑の生涯を節目ごとに振り返り、その業績と地域に遺したものをこれからどう伝えていくかを考えるパネルディスカッションを行いました。

コーディネーターとして双日株式会社の小林正幸氏、パネリストとして基調講演を行った作家の玉岡かおる氏、神戸大学大学文書史料室室長補佐の野邑理栄子氏、内子町立内子小学校校長宮瀬弘吉氏が登壇されました。



はじめにコーディネーターの小林氏より「双日、そして鈴木商店記念館について」、パネリストの野邑氏より「神戸高商時代の高畑誠一」をテーマにプレゼンテーションが行われました。

小林氏からは、双日株式会社について、高畑誠一の設立した日商株式会社を前身としており、現在も鈴木商店時代からの事業を数多く受け継いでいることが紹介されました。

また、WEB ミュージアム・鈴木商店記念館について、内子についての記事があること、2017年には鈴木商店100周年を記念して神戸市の本店跡地にモニュメントを設置するなど様々な活動が行われていることについても紹介されました。

野邑氏からは神戸高商が世界で活躍できる人材を育てることを目的とした学校であったことを紹介。高畑が「外国貿易に従事すること」を目指して入学した後、勉強に励み、特待生に選出されたこと、卒業席次は2席だったものの、卒業式では水島校長の挨拶を外国人の来賓のために同時通訳するなど、英語力を高く評価されていたことなどを解説されました。



続いて、高畑の生涯を内子の教育、鈴木商店入店前（学生時代）、鈴木商店入店後の節目ごとに振り返ってディスカッションが行われました。発言の要旨は以下の通りです。

○宮瀬氏

高畑の生まれた明治20年代の内子は製蠟業の盛んな時期で大変豊かであり、教育に力を入れていた。高畑自身が人格形成に大きく影響したとしている自主的な教育組織「内子尚武会」の存在が大きい。高畑氏の生涯について、常に前向きな印象がある。こうした面を今の子どもたちにも見習って欲しい。その生き方を引き続き授業でも取り上げていきたい。

○野邑氏

高畑は神戸高商卒業後に進学を希望していたが、家庭の事情を鑑み、断念して就職している。悔しい思いを抱えながら実社会に出たことが、後の偉業を生む転換点だった



のでは。

鈴木商店には高畑の後に多くの神戸高商出身者が入社している。高畑がロンドン支店長であった間にも多くの後輩がロンドンに派遣されており、信頼できる同輩に支えられて「カイザー」と評されるまでになったとも言える。

○玉岡氏

高畑と同時代に生きた人たちに感じるのは「欧米の植民地になることなくやっつていこう」という気概。外国と対等に戦うには何をすれば良いのか見えていた。こうした視点を持つことはこれからの日本にも必要。

高畑の英語への渴望は、外からきたものではなく、川の向こうに何があるのだろうと考えさせる土地柄によるのではないかと。日本の原風景ともいえるまちの雰囲気大切にしたい。

会場にもマイクが向けられ、調査を担当した高校生から「展示されていた卒業論文のボリュームにびっくりした。こういう立派な人に少しでも近づけるよう勉強したい」という感想や高畑誠一とゴルフの関わりについてなど、質問が出されました。

最後に小林氏より、「高畑は開国後日本が最も輝いた時代に活躍した人物であり、日本経済の発展を象徴する人物である。いずれドラマの主題にもなりうる人物でもあると思っている。そうしたことも視野に入れながら、内子町だけでなく、我々関連企業も高畑の遺した財産を活かし、伝えていくためにがんばらなければならないと思っている」とまとめていただき、終了となりました。

シンポジウムは約 180 名の方にご参加をいただき、特別企画展にも会期中約 4000 名の方にご来場いただき、盛況のうちに終了しました。

(資料の借用や調査にご協力いただきました皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。)